イチモンジタナゴ　*Acheilognathus cyanostigma* Jordan et Fowler

【選定理由】

希少な種であるものの、木曽川水系のイチモンジタナゴは国内外来種であるとの見解もある。現時点では、自然分布か、移殖による分布かを判断する材料が十分に揃っていないため、評価が困難である。

【形　態】

体長 6cm。体型は薄く側扁するが、タナゴ類の中では体高が低い。側線は完全。口ひげは 1 対あるものの短く痕跡的である。側線鱗の前方から 6 枚目辺りの上方付近に瞳ほどの暗緑色の斑点がある。また、この斑点から尾鰭基底まで太く長い暗色縦帯がある。雄は婚姻色が現れ、背側が青緑色、頭部側面と体側は紫桃色となり、尾鰭基底まで暗色縦帯の上に紫紅色の縦帯が入る。背鰭と尻鰭は鮮やかな桃色に、尾鰭の後縁が紫紅色になる。吻や目の周りに追星が現れる。

【分布の概要】

【県内の分布】
豊川（移入）、矢作川（移入）、木曽川。

【国内の分布】
濃尾平野、近畿地方。

【世界の分布】
日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部の浅い池沼、これに連なる用水、河川敷内のワンドに生息する。流れが緩やかで、水草が茂った泥底や砂泥底を好む。産卵期は、4～8 月に淡水性二枚貝のドブガイ類に卵を産み付ける。卵は 1 ヶ月ほどで稚魚に育ち、貝の外に出る。雑食性で、付着藻類、底生の小動物を食う。

【現在の生息状況／減少の要因】

近年は、木曽川水系で少ないながらも採集例がある。主な減少の要因は、生息場所となる河川の改修やワンドの消失による環境変化である。また、鑑賞を目的とした本種の過剰な捕獲も大きな要因となっている。この他、タイリクバラタナゴとの競争、産卵母貝となるドブガイ類の減少、ブラックバスやブルーギルによる捕食も大きな要因である。

【保全上の留意点】

種としての保全意義の有無を明らかにするためには、木曽川水系の個体群が形成された経緯を整理する必要がある。また、本種を含めたタナゴ類は、ドブガイ類など二枚貝に卵を産み付ける習性があり、その生息を支える底泥環境を保全することが重要である。

【特記事項】

自然分布とされる木曽川水系のイチモンジタナゴをDNA解析したところ、琵琶湖産である可能性が出てきた（Kitazima et al., 2015）。また、矢作川水系と豊川水系のイチモンジタナゴは、琵琶湖産アユに混入して放流された国内外来種と考えられている。

【引用文献】

Kitazima, J., M. Matsuda, S. Mori, T. Kokita and K. Watanabe, 2015. Population structure and cryptic replacement of local populations in the endangered bitterling *Acheilognathus cyanostigma*. *Ichthyological Research* . 62:122-130.

【関連文献】

細谷和海, 2013. コイ科. 中坊徹次（編）, 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp.308-327, 1813-1819. 東海大学出版会, 神奈川.
長田芳和, 2001. イチモンジタナゴ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編）, 山渓カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版, p.327. 山と渓谷社, 東京.

（浅香智也）